九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

現行民法典を創った人びと（20）査定委員23・24・25 ： 渋沢栄一・阿部泰蔵・末延道成、外伝16 ： 現行民法典起草者富豪ランキング

七戸，克彦
九州大学大学院法学研究院 ： 教授

https://hdl.handle.net/2324/19554

出版情報：法学セミナー. 55 (12), pp.48-51, 2010-12-01. NIPPON HYORONSHA
バージョン：
権利関係：

現行民法典を創った人びと[20]

九州大学教授 七戸克彦

法学セミナー 2010/12/no.672

1｜渋沢栄一は、天保11年２月13日武蔵国榛沢郡血洗島（埼玉県深谷市）の豪農・渋沢市郎右衛門の長男に生まれた。青年時代は尊皇攘夷思想に傾き文久３年（1863年）高崎城襲撃・横浜洋館焼討の暴挙を企て京都に亡命、翌元治元年（1864年）一橋家に仕えて幕臣となり、慶応３年（1867年）パリ万博派遣の徳川昭武に随従して価値観が一変する。維新後明治２年に大蔵省に出仕（租税正）、大蔵卿は伊達宗城（穂積家主君）、大蔵大輔が大隈重信、大蔵少輔が伊藤博文。その後明治４年に大蔵卿は大久保利通、大蔵大輔は井上馨に交替するが、明治６年大久保・大隈の積極財政に異を唱えた渋沢は、尾去沢銅山事件の渦中にあった上司・井上馨や井上配下の益田孝とともに下野[1]、明治６年設立の第一国立銀行の総監役、明治８年以降大正５年の引退まで41年の長きにわたって頭取を務めた。

2｜また、彼は、民間の小資本を集合させて大資本とする合本主義に立って500社以上の会社の設立に関与し、民間自立型の産業育成、株式会社制度の普及に貢献。その初期における成功例が日本最初の海上保険会社・東京海上であり、同社は、華族から資産運用を託された渋沢が、自前での会社設立に頓挫した三菱創業者・岩崎弥太郎の資本参加を取り付けて、明治12年に設立したものである。それゆえ同社の筆頭株主は当初は華族組合であったが、しかしその後三菱は株式を買い集めて同社を傘下に収める。

一方、渋沢は、郵便汽船三菱会社による海運業独占に対抗して、井上馨や益田孝と結んで三井の資本で明治15年に共同運輸会社を設立、熾烈なダンピング競争による共倒れを危惧した政府の仲介により、明治18年両社は合併して日本郵船となるが、やはりその後三菱は株式を買い集め同社もまた支配下に置く。

これと対照的に、渋沢には会社を所有・支配しようとする意思はまったく認められず、渋沢財閥の中核たる第一銀行ですら株式保有率は２割にすぎなかった。彼は家族団欒の場で子供たちに次のように語ったという。「私がもし一身一家の富むことばかりを考えたら、三井や岩崎にも負けなかったろうよ。――ここで微笑しながら――これは負け惜しみではないぞ[2]」。彼の本質は、要するにただの世話好き親父なのであって、彼に向けられた「閨閥の形成（斡旋）者」との批判も、会社設立と同様（彼の考えるところの）理想的なカップルをセッティングするのが好きなだけともいえる。

3｜さらに、渋沢は、明治８年東京営繕会議所委員就任以降、９年東京会議所、11年東京商法会議所、16年東京商工会、24年東京商業会議所の会頭となって、組織を商工業者の世論形成団体へと育て上げ（今日の東京商工会議所）、その間明治８年森有礼設立の商業学校・商法講習所の運営を引き継ぎ同校の国立化（今日の一橋大学）にも尽力して、商工業者の社会的地位向上に努める。一方、銀行業者団体に関しても、明治10年に択善会を組織し、13年には東京銀行集会所の委員長となる。

4｜法典論争時の明治23年には東京商工会・東京銀行集会所に商法質疑会を設置、法律取調委員の本尾敬三郎と長谷川喬が説明員として出向いている[3]。その後東京商工会は延期論に固まり、翌24年東京商業会議所は法案修正のための調査委員を選出し顧問に梅謙次郎を招聘（娘婿・穂積陳重の周旋によるという）、そして法案の延期・修正決定後の明治26年４月１日に内閣総理大臣・伊藤博文に対し法典調査会の委員の中に東京商業会議所会員の加入を求め、結果、同月20日任命の査定委員21人中に渋沢栄一と阿部泰蔵の２名が加わることとなる。

［査定委員㉓］

渋沢栄一

しぶさわ・えいいち（1840-1931）

『日本歴史大事典２（こ～て）』（小学館、2000年）401頁より。

1） 渋沢の下野を知った三井の総理事・三野村利左衛門は後任の総理事就任を要請するも渋沢は言下に謝絶、大三井の大番頭のポストなら喜んで承諾すると信じて疑わなかった三野村には実に予想外の返事であった。渋沢栄一（述）『青淵回顧録（上巻）』（青淵回顧録刊行会、1927年）382頁。一方、益田孝は、明治７年に井上馨設立の先収会社の頭取となり、９年合流した三井物産の社長に就任して三井に重きをなした。

2） 渋沢秀雄（栄一四男・東宝会長）『明治を耕した話――父・渋沢栄一』（青蛙房、1973年）195頁。

3） 村上一博「明治23年旧商法に対する東京商工会の修正意見と法治協会の駁論」法律論叢（明治大）79巻１号（2006年）２頁以下、高田晴仁「福沢諭吉と法典論争――法典延期・修正・施行――」福沢諭吉年鑑36号（2009年）４頁。

1｜阿部泰蔵[4]が渋沢栄一とともに法典調査会委員に任命された理由について、明治生命（編）『阿部泰蔵伝』は、単に東京商業会議所を代表したものとは捉えず、法律的素養の故とする。彼は「若き日に法律家たらんとしたこともあった[5]」というのだが、思春期の彼は目移りばかりしている。嘉永２年４月27日三河国八名郡下吉田村の医師・豊田鉉剛の四男に生まれた彼は、万延元年（1860年）12歳のとき吉田藩藩医・阿部三圭の養子となるが、13～14歳頃より医者を嫌い、泰蔵自身の弁によれば「当時の医師は、坊主などと一緒に見られて、甚だ格式の悪いものでありましたから、私はどうか儒者にならうといふ考を起し[6]」、文久３年（1863年）15歳で津藩の大儒・斎藤拙堂に入門する。ところが、その仲介の労を執ってくれた医師・橋本一斎方で蘭書を見ているうちに今度は「蘭学をやって見ようと云ふ考が起り」、翌元治元年（1864年）江戸に出て杉田玄瑞などに学ぶが、その後関心は英学へと移って、慶応３年（1867年）５月青地信敬（谷敬一郎）に入門。だが、同年末に青地が塾を閉じたため、翌慶応４年１月慶応義塾に入塾した、という経歴である。上野彰義隊の戦争の最中に福沢諭吉のウェーランド経済書の講義を聴いた塾生の一人で、明治３年塾頭。９月の終業後、11月大学南校の少教授となるが、翌４年９月編輯権助に転じ、５年８月の学制頒布の際には「修身論」が小学校教科書に採用される。明治８年退官して慶応義塾教師となるも、９年４月文部省に再出仕して文部大輔・田中不二麿の米国フィラデルフィア博覧会視察に随行。

2｜10年帰国後、11年12月文部省を辞した彼が、生命保険事業に乗り出すのは、明治12年末の三菱の忘年会の席上、荘田平五郎（慶応義塾教師から三菱がリクルートした人材。麒麟麦酒の名付け親）・小泉信吉（のぶきち）（小泉信三の父、小泉信吉（しんきち）の祖父。当時は同年設立の横浜正金銀行副頭取）らが欧米の生命保険制度の導入を話題にして以降である。彼ら慶応義塾同窓より生命保険会社創立の主任に任ぜられた阿部は、明治14年７月わが国初の生命保険会社・明治生命の初代頭取に就任。

その後、阿部は、生命保険制度の啓蒙と代理店開拓のため地道な全国行脚を続け、会社の業績も次第に上向きとなるが、明治21年には帝国生命（現在の朝日生命）、翌22年には日本生命が開業して、生命保険業界は三社鼎立状態となり、明治生命の運営を憂慮した福沢諭吉は、岩崎久弥（慶応義塾卒業生で後の三菱三代目）のポケットマネーで株式を買い集めてもらうよう阿部・荘田らに指示、その後増資のたびに三菱の持株比率は増えて、明治生命は完全に三菱傘下となる。

3｜一方、阿部は、火災保険の分野にも乗り出し、明治21年５月荘田平五郎・小泉信吉ほか三菱の末延道成・増島六一郎（三菱の援助で留学した経緯で三菱の法律顧問）とともに火災保険会社の創設委員となり、その後明治24年２月２日開業の明治火災（東京火災（安田火災海上から現・損保ジャパン）に次ぐ日本で二番目に古い火災保険会社）の初代取締役会長に就任。

4｜ところが、大正４年４月同じ三菱の海上保険会社・東京海上が火災保険の兼営を開始し、同年９月東京海上は増資を行ってその株式９株と明治火災の株式１株の交換を提示、明治火災の株主の多くはこれに応じたため、東京海上は明治火災の株式の大半を取得して完全子会社化、その結果10月阿部は取締役会長を辞任し、代わって東京海上取締役会長の末延道成が明治火災の取締役会長を兼務することとなった（なお、その後、明治火災は、大正８年開業の三菱海上火災とともに、昭和19年東京海上火災と合併）。

さらに２年後の大正６年２月16日には明治生命の取締役会長も退任（後任は荘田平五郎）。その２年後の大正８年２月熱海の旅館で入浴中に雪崩に遭って寝たきりとなり、大正13年10月22日没。享年76歳。

［査定委員㉔］

阿部泰蔵

あべ・たいぞう（1849-1924）

『明治生命百二十年史（1881～2001）』（明治生命保険相互会社、2003年）７頁より。

4）三田商業研究会（編）『慶応義塾出身名流列伝』（実業之世界社、1909年）725頁、遠間平一郎（妖星）『財界一百人』（中央評論社、1912年）89頁、矢野滄浪『財界之人百人論』（時事評論社、1914年）271頁、『阿部泰蔵一代記』（私家版、1931年）、実業之世界社（編）『財界物故傑物伝（上巻）』（実業之世界社、1936年）５頁、明治生命（編）『本邦生命保険創業者・阿部泰蔵伝』（明治生命保険相互会社、1971年）、富田仁（編）『事典・近代日本の先駆者』（日外アソシエーツ、1995年）65頁、日本工業倶楽部（編）『日本の実業家』（日外アソシエーツ、2003年）10頁。

5）前掲注４）『阿部泰蔵伝』348頁。

6）高橋義雄（編）『福沢先生を語る・諸名士の直話』（岩波書店、1934年）「阿部泰蔵氏直話」113頁以下。

1｜英米法専攻の大学院生や研究者の中には、末延財団の奨学金(博士60万円・修士50万円)や在外研究援助(200万円）を受けている人も多い。この財団法人は、昭和８年末延道成の遺産の一部で設立されたものである。また、立教大学の学生諸君の中には、鳥洞奨学金（40万円）を受けている人もいるだろうが、この「鳥洞」というのも、末延道成の雅号に由来する。

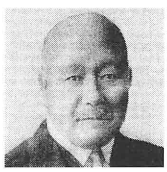
2｜末延家は代々高知県土佐国香美郡東川に住む豪族で、父・末延立誠（1827-1896）の代に夜須川分添地に移り医業の傍ら寺子屋を開く。安政２年11月19日立誠の長男として生まれた彼の幼名は佐代治（道成と改名するのは明治22年９月７日[7]）。15歳で藩校・致道館に入り、明治５年大阪に出て英語を学んだ後、上京して開成学校から東京大学法学部を明治12年卒業。同級は増島六一郎・大原鎌三郎・大谷木備一郎・高橋一勝・磯野計・秋山源蔵・山下雄太郎・三宅常倫（恒徳。三宅雪嶺の兄）と末延の計９名で、末延以外の８名は代言人・弁護士になっているが（高橋・磯野・山下は12年10月、大谷木は14年６月、大原は16年１月に代言人登録、増島は英国留学から帰国後の17年９月登録、三宅は18～23年東京専門学校講師の後25年10月登録、秋山は司法省に出仕して31年３月10日大審院判事まで昇るが同月18日に退職して弁護士)、末延は卒業後直ちに岩崎弥太郎の援助で留学し、帰国後は郵便汽船三菱会社に入社。人材を求める三菱が、土佐出身の末延を留学を餌に釣ったのであろう。なお、末延の留学の翌13年には、磯野・山下・増島の３名も郵便汽船三菱会社の給費留学生として英国に渡っており、その際、磯野は岩崎弥太郎相手に「余は決して此恩義の為めに、三菱の奴隷とならざるべし」と宣言していたにもかかわらず[8]、17年の帰国後は代言人を辞めて末延と同様郵便汽船三菱会社に入社し神戸出張所取締（実態は荷受所の現場監督）となる。もっとも、独立心の強い磯野は、翌18年10月退職して横浜で船舶納入業、食料・酒・煙草の輸入販売業を始める。今日の明治屋である。

3｜これに対し、末延は社内で累進して支配人に昇り、石川七財（三菱創業期の幹部）に認められて長女・辰（後に田鶴）子と結婚、三菱社内の地歩を固める。明治18年９月設立の日本郵船では支店長から副支配人。

さらに、明治20年には明治生命、東京海上の取締役。21～23年海外巡視中の22年には滞在先のロンドンから荘田平五郎とともに東京・丸の内の練兵場跡地13万5000坪の買受けを二代目・岩崎弥之助（弥太郎弟。明治18～26年）に進言、三代目・岩崎久弥（弥太郎長男。明治26～大正５年）は「三菱ヶ原」と呼ばれた空地にロンドンのロンバート街を模した赤煉瓦造りの近代的オフィス街（「一丁倫敦」）を築き上げた。

一方、末延は、帰国後は日本郵船を辞して三菱の保険部門を専担し、明治24年設立の明治火災の取締役、明治30年東京海上取締役会長（～大正14年）、さらに東明火災海上（明治40年設立の再保険会社。社名は親会社の東京海上・明治火災から二字を取ったもの。現在の日新火災海上）取締役社長等を歴任し、本社の荘田平五郎、銀行の豊川良平、海運の近藤廉平（日本郵船第３代社長）と並び「三菱の四天王」と称された。その一方で、明治26年山陽鉄道の取締役、以降北越鉄道、東武鉄道、豊川鉄道、三信鉄道の社長を務めるなど鉄道事業にも従事。さらに北樺太石油、北樺太鉱業など多数企業の重役にも就任。政治面では、大正５年１月より昭和７年５月24日の死去まで貴族院勅撰議員。

[査定委員㉕]



末延道成

すえのぶ・みちなり（1855-1932）

『高知県人名事典（新版）』
（高知新聞社、1999年）398頁より。

4｜わが国にプライバシーの権利をはじめて紹介した東京大学法学部教授・末延三次（1899-1989）は道成の養子（旧姓・平井）。昭和２～６年の英米留学の後、昭和７年１月末延に改姓し、同年５月の道成の死後、遺志に従い翌８年７月末延財団を設立して理事長に就任、さらに昭和45年東大退官後の立教大学教授時代には同大学生のため鳥洞奨学金を設ける。号の由来である鳥居坂の邸宅(設計はジョサイア・コンドル）跡地は現在シンガポール大使館。昔の三菱重役の財力は今のサラリーマンの想像を絶する。

7）　末延道成の履歴については、『当代の実業家・人物の解剖』（実業之日本社、1903年）473頁、『財界物故傑物伝（上巻)』（実業之世界社、1936年）616頁、橋詰延寿『夜須町風土記』（夜須町、1968年）268頁、『高知県人名事典』（高知市民図書館、1971年）178頁、寺石正路『土佐偉人伝』（歴史図書社、1976年）536頁、『夜須町史（下巻)』（夜須町教育委員会、1984年）369頁、『高知県人名事典（新版)』（高知新聞社、1999年）398頁。

8）　竹越与三郎『磯野計君伝』（明治屋、1935年）35頁。

［外伝⑯］

現行民法典起草者富豪ランキング

1億円以上	岩崎久弥（45） 三菱合資会社社長（男爵）	先代が時の政府と結託して悪手段を弄し海運業にて儲けたるもの。		1億円以上	三井八郎右衛門〔高棟〕(53) 〔三井家10代当主〕（男爵）	旧家。容貌：貴公子の風あり。性格：温順。嗜好：能楽・謡。
4000万円	住友吉左右衛門（46） 鉱業・銀行・倉庫	別子鉱山其大部を占む。鴻池に次ぐる大阪での旧家。		3000万円	安田善次郎（71） 銀行業	高利貸。偽君子然たり。残忍酷薄にして日本一の吝嗇家也。
3000万円	藤田伝三郎（69） 鉱業〔小坂鉱山〕	一代，御用商人と鉱業にて儲く。住友と並び称せらる、関西の富豪。		2000万円	古河虎之助（26） 鉱山業	先代市兵衛氏が足尾銅山にて儲けたるもの。壮士俳優然たるやさ男。
1500万円	前田利為（26） 陸軍歩兵中尉（侯爵）	財産の由来：〔前田家〕16代目〔当主〕。		1500万円	島津忠重（24） 海軍少尉（公爵）	財産の由来：先代の遺産〔＝島津家30代当主〕。性格：活発。
1500万円	毛利元昭（44） 貴族院議員（公爵）	容貌：痩ぎす。性格：温良にして親切，而して頗る礼に篤し。				
1000万円	大倉喜八郎（73） 御用商人	政府の御用商にて儲けたる一代身代。容貌：婆顔。性格：豪宕。		1000万円	村井吉兵衛（47） 銀行家	一代身代にして烟草にて的てたり。嗜好：方々に交際し廻る事。
～（中略。以下主要人物のみ抜粋）～						
300万円	服部金太郎（50） 時計商	時計製造にて儲く。容貌：面長にして商家旦那様然たり。		300万円	益田孝〔鈍翁〕(60) 三井同族会副部長	財産の由来：月給のひろひ取り。嗜好：金貯め。
200万円	神谷伝兵衛（55） 酒問屋	財産の由来：一代，浅草の居酒屋より叩き上げたるもの。		200万円	浅野総一郎（62） セメント業	コークス，セメントにて儲く。性格：野卑奸佞。嗜好：お酌。
200万円	山本権兵衛（58） 海軍大将（伯爵）	財産の由来：之を要するに軍艦のコンミッションの生みしもの。		200万円	井上馨（74） 官中議定官（侯爵）	財産の由来：高等才取して儲けたり。容貌：おかめの面。
200万円	渋沢栄一（70） 第一銀行頭取（男爵）	一代にして富を成す。容貌：温良長者の風を具へたる恵比寿様。		200万円	松方正義（74） 大日本赤十字社長（伯爵）	財産の由来：蔵相たりし時どうかして大に儲けたり。
150万円	伊東巳代治（53） 枢密顧問官（子爵）	財産の由来：官吏を利用し相場して儲く。嗜好：盆栽、女。		150万円	福沢捨次郎（40） 時事新報社長	故〔諭吉〕先生の氏に遺されたる時事新報は……200万円以上の価格。
100万円	山県有朋（73） 枢密院議長（公爵）	容貌：清瘦5尺7寸の大男。性格：厳正・隠忍。		100万円	桂太郎（63） 内閣総理大臣（伯爵）	財産の由来：在官中に於けるコンミッション。性格：八方美人。
100万円	大隈重信（72） 早稲田大学総長（伯爵）	維新早々蔵相となり官を利用せり。容貌：阿弗利加ダホメー人種の相。		100万円	大河内正敏（46） 東京帝国大学助教授（子爵）	養子。容貌：背高くして立派。性格：学者にして外交術に長ず。
100万円	近藤廉平（57） 郵船会社長	月給を以て色んな事をして儲く。容貌：貴公子然たり。性格：温厚。		80万円	細川潤次郎（76） 枢密顧問官（男爵）	容貌：村夫子の風あり。性格：厳重吝嗇。嗜好：学問に熱心。
70万円	増島六一郎（53） 弁護士	財産の由来：外人の特許代理をなして儲く。		50万円	青木周蔵（66） 貴族院議員（子爵）	養子。性格：豪宕不屈。嗜好：読書，西洋に心酔す。
50万円	高橋是清（56） 日本銀行副総裁（男爵）	財産の由来：財務官以来俄に富裕となれり。性格：傲放を装う。		50万円	徳川慶喜（73） 貴族院議員（公爵）	政権奉還と共に無一物となりしも，後ち貰い貯む。

1｜上の図表は、『実業之世界』誌の明治42年新年号附録「東京大阪五拾万円以上の財産家調べ」より作図した。トップ10（11）は、横綱格の三井・三菱を筆頭に財界８名と、大大名（加賀・薩摩・長州）の当主３名。一方、法典調査会のメンバー総勢70名のうち、財産家として名が挙がっているのは、網掛けを施した４名（渋沢栄一、松方正義、伊東巳代治、細川潤次郎。なお、大正11年納税者番付では、24位に末延道成、松方正義は30位で、渋沢栄一は107位）。

2｜その他、デンキブランの神谷バー創業者の保有資産が、穂積兄弟の岳父・渋沢栄一や浅野総一郎と同額というのはすごいが、中央大学（英吉利法律学校）の創立者であるバリストル増島に関しては、彼の儲け方からすれば当然であろう。東京市不正鉄管納入事件では２万5000円もの弁護士報酬を要求して依頼人である東京市相手に訴訟を提起し[9]、また、渋沢栄一ですら報酬額の減額を懇請したほどの人である[10]。

3｜なお、東京帝大・工科大学助教授（明治44年より教授）の大河内正敏は、旧上総大多喜藩主・大河内正質の長男で、旧豊橋吉田藩主・大河内信好の婿養子となった人。それゆえ上記図表のごとく元来資産家であったところへ、大正10年財団法人・理化学研究所の３代目所長となって以降は、所長在職25年の間に理研を産学複合体型の巨大新興財閥に育て上げた。女優・河内桃子（本名・大河内桃子）の祖父である。

もっとも、理研の創設者もまた渋沢栄一で（大正６年設立者総代）、ＧＨＱは彼の持株会社・渋沢同族会社を「財閥のハシクレに加えたが〔＝昭和21年12月28日理研コンツェルンとともに第２次指定〕、調査の結果、財なき財閥であることが判明したので、免除することにした[11]」。他方、財閥解体後の理研グループでは、理研光学の市村清がリコー三愛グループを築いてゆく。

9）奥平昌洪『日本弁護士史』（有斐閣、1914年）769頁以下。
10）日本弁護士協会録事72号（明治37年１月）65頁。
11）渋沢秀雄・前掲注２）131頁。

（しちのへ・かつひこ）